

研究概要報告書

資料 - 3

(/)

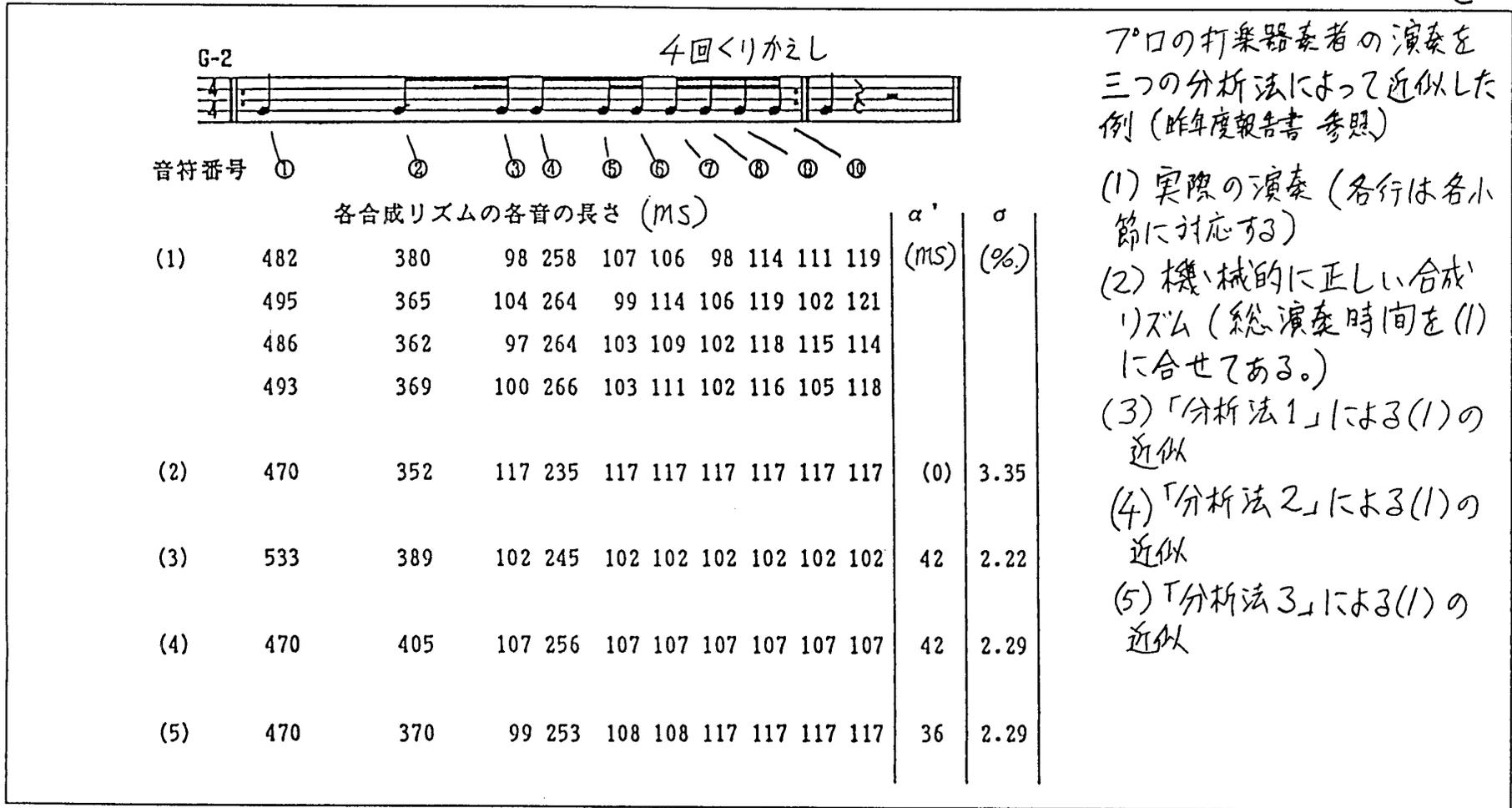
研究題名	音楽演奏リズムの知覚心理学的分析	報告書作成者	中島 祥好
研究従事者	中島 祥好、寺西 立年、佐々木 隆之		
研究目的	演奏家が実現するリズムは、たとえそれが楽譜を忠実に再現しようとしたものであっても、楽譜上のリズムとのあいだに系統的なずれを生ずる。短い音符に関して、前年度の研究で、「分析法1」、「分析法2」、「分析法3」を提案した（前年度報告書参照）。これらの妥当性を、演奏の分析、合成演奏の心理評価によって検討するのが今回の目的である。		
研究内容	<p>演奏実験については、これまで3人の演奏者のデータしかなかったので、さらに1人を追加した。4人のデータを分析したところ、「分析法2」と「分析法3」とが同程度にうまく当てはまることが多く、どちらかと言えば「分析法3」のほうが、演奏リズムをうまく近似することが多かった。（今年度は、「分析法3」をすべてのデータについて検討した点が、昨年度より進んでいる。）</p> <p>「分析法1」によって合成したリズムが、正確さという点で高い評価を得られないことが、これまでに判っている。そこで、今回は「分析法2」と「分析法3」とを、心理評価実験によって比較した。この二つの分析法が、実際に異った合成リズムを生ずるのは、楽譜上のリズムがある程度複雑な場合に限られる。そのような条件では、多くの場合、「分析法2」、「分析法3」のいずれも適用しない機械的に正しい合成リズムが、実際にも正しいと感じられることが判った。しかし、ずれを与えたほうが正しいと評価される場合も確かに存在し（表1、図1）、今後の検討を要する。演奏実験と心理評価実験との違いについても、更に研究が必要である。 様式-9</p>		

171

説明書

図1

(1/2)



プロの打楽器奏者の演奏を
三つの分析法によって近似した
例 (昨年度報告書 参照)

(1) 実際の演奏 (各行は各小
節に対応する)

(2) 機械的に正しい合成
リズム (総演奏時間を(1)
に合わせてある。)

(3) 「分析法1」による(1)の
近似

(4) 「分析法2」による(1)の
近似

(5) 「分析法3」による(1)の
近似

(注: フローチャート図, ブロック図, 構成図, 写真, データ表, グラフ等 研究内容の補足説明に御使用下さい)

様式-10

説明書

表 1

(2/2)

リズム	正確さ	不正確さの手がかり、その他についての評論
(1)	80 /100	②がほんの少し短く2拍目が3連符に近くなっている ④が前に出すぎ(③と④がくっつきすぎ)。2拍目と3拍目のあいだで少しプレスをいれるとよい。
(2)	70 /100	2拍目(②と③)が3連符に聴こえる。 ⑥と⑦との間隔が広すぎる。
(3)	60 /100	③の音をひっかけすぎ(②に対して③が短すぎる) 4拍目がころお(⑦~⑩が短い)
(4)	90 /100	③をもう少しうしろへもってくると良い。
(5)	80 /100	①と②のあいだでプレスを入れて。 ③と④とがくっつきすぎ、④をもう少しうしろへもってくれば良い。4拍目(⑦~⑩)が広すぎ、少しつめて。

図1の演奏者自身が、実際の演奏リズム、近似演奏リズムを評価した例。図1の(1)~(5)について自分の演奏と関係があるとは知らず、正確さ(=楽譜上の時価に対する忠実さ)を100点満点で評価し、楽譜に即した評論を加えたもの。(2)の機、械的に正確なリズムよりも、さらに正確に聴えるリズムのあることが判る。これは、以前の心理評価実験にも対応している。また、(2)に対する評論から見ても、一拍未満の音符の物理的な長さの比率を、楽譜上の比率よりも偏ったものにしないと、正確だと感じられないことが判る。これが、「分析法2」、「分析法3」の基本的な考えかたであることは、言うまでもない。

(注: フローチャート図, ブロック図, 構成図, 写真, データ表, グラフ等 研究内容の補足説明に御使用下さい)

様式-10